

分析 | インタビュー

ベネズエラでは、コミュンは単なるユートピアではない : シラ・パスクアル・マルキナとの対話

コミュンは、ベネズエラの社会主義プロジェクトにおける手段であり、また目的でもある。

ベルシス・イザベル・ロドリゲス・カルバロ、フェルナンド・ルイス・ロハス
2025 年 2 月 7 日



Cira Pascual Marquina (Venezuelanalysis)

キューバの雑誌「ラ・ティッツァ」のインタビューで、VA（ベネズエラアナリシス）のシラ・パスクアル・マルキナは、ベネズエラ社会主義プロジェクトの道筋と最終目標としてのコムーナについて語っています。彼女はまた、マドゥーロ大統領が1月10日に3期目に就任した後のベネズエラの状況についても掘り下げています。

* * *

シラ・パスクアル・マルキナさんは、自分のことをどのように認識していますか？ 国際主義者、コミュニード、アート・キュレーターとして・・・？ そして、なぜそのように考えるのですか？

私は、根っからのベネズエラ人であり、ボリバル・プロセスの一部で、アレクシス・ヴィヴ愛国勢力(わが国のコムーナ化を推進する組織)の一員で、また大衆教育者で、戦闘的な研究者であると思っています。

なぜこのように考えるのか？ 私はボリバル革命の変革力に触発されてベネズエラに来ました。この変革力はボリバル主義の原則を私たちの大陸、ヌエストラ・アメリカ全土で再活性化し、後に社会主義を提唱しました。この再活性化は、「歴史の終わり」という物語が実質的に覇権を握っており、社会主義の未来は決して来ないと暗示していた時代に現れました。

私たちの革命は、2005 年から 2006 年頃にかけて社会主義の地平に再び火をつけましたが、それはすでに自らを反帝国主義と定義していました。この運動は、単にパトリア・チカ(小さな祖国)のためのものではありません。それはパトリア・グランデ(偉大なる祖国)のためのものです。

私が自分を大衆教育者であると考えているのは、クリス・ギルバートと共同で Escuela de Cuadros(幹部学校)を設立したからです。それはグローバル・サウスの見地からマルクス主義を学び、議論するための自習運営スペースです。さらに私は反乱の歴史と草の根活動で知られるカラカスの活気あるバリオ、「23 デ・エネロ」にあるエル・パナル・コムーナの一員であることを光栄に思っています。そこでは、私たちの共同の苗床である Pluriversidad Patria Grande (パトリア・グランデ総合大学)に貢献しています。クリスと一緒に、私は戦闘的な研究にも携わり、さまざまなコムーナと協力して、コムーナが自分たちの経験や反省を共有し、アメリカ帝国主義に包囲された国におけるコムーナ建設について理論化する実証プロジェクトに取り組んでいます。

コムーナのメンバーは、チャベスが『青の書』(1991-1992 年)で提唱した「参加型で主役的な民主主義」を体現しながら、自己組織化を通じて自分たちのコムーナを建設しています。この形態の直接民主制は、ボリバル革命の初期に、「テクニカル・ウォーター・テーブル」や「アーバン・ランド・コミッティー」(基本的には集会を基盤とした空間)など



Violent protests following the presidential elections on July 28. (teleSUR)

のイニシアチブを通じて形成され始めました。2006 年、これらの経験は、特定のコミュニティ問題に取り組むことに焦点を当てた集会主導の組織であるコムーナル評議会の設立に結実しました。2009 年、チャベスはコムーナ概念を導入し、さまざまなコムーナ評議会を一つの単位に集約するだけでなく、社会主義的直接民主主義のための効果的な空間を創造する上で大きな飛躍を遂げました。この空間は、生産手段の集団管理と使用权を通じて、新しい社会的関係を作り上げることを目的としています。

近年、私の戦闘的な活動は、ベネズエラの社会主義の目的であり手段でもあるコムーナ・プロジェクトを中心に組み立てられています。

ベネズエラのニコラス・マドゥーロ大統領の就任式が1月10日に行われました。主流メディアは、その時期に緊張、不安定、分極化の風潮を予想していました。この予測は現実になったのでしょうか？

1 月 10 日までの数日間、主流メディアが戦争の太鼓を叩いていただけでなく、ボリバル・プロセスに参加している人々もまた、厳戒態勢にありました。7 月の選挙以来、右翼の派閥、ファシスト分子、そしてアメリカ合州国の彼らのボスたちは、我々の人民主権のプロセスを弱体化させるために協力して努力をしてきました。この破壊工作は革命が始まって以来続いていましたが、7 月 28 日以降、脅威は激しさを増しました。

実際、資本主義の利益に同調する主流メディアは、「暴力的な解決策」をほのめかす物語を作り上げていました。7 月 28 日以降、カラカスや他の地域の街路で暴力の風潮が醸成されました。それは明らかに海外から仕組まれたものです。悲劇的なことに、チャビスタ（チャベス派）の同志 2 人が信念だけを理由に殺害され、他の者も衝突で死亡し、チャビスタを公然と名乗る多くの人々が脅威に直面しました。このような状況は前例のないことではありません。私たちは、2014 年と 2017 年のファシスト反乱(私たちはこれを「グアリンバ」と呼んでいます)でも同様の挑戦を経験しました。

1 月 10 日が近づくにつれ、私たちは、右翼の反乱——究極的にはファシスト、親帝国主義者、反民主主義——が出現し、資本とその帝国主義的支援者の絶対的な命令を押しつけるかもしれないと、心から懸念していました。チャビスモ（チャベス主義者）は厳戒態勢を敷いていました。

幸いなことに、その数日間は驚くほど平穏でした。1 月 9 日、野党のより過激な派閥は、街頭デモを呼びかけましたが、ドローンの映像によればせいぜい約 2000 人しか集まりませんでした。この出来事は、過激な野党の指導者であり、帝国主義の傀儡であったマリア・コリーナ・マチャドの「帰還」を印象づけるためのものでした。メディアは、すぐに暴かれるような嘘で埋め尽くされた光景を描き出したにもかかわらず、野党はほとんど力を発揮しませんでした。対照的に、私たちはボリバル・プロセスとニコラス・マドゥーロ大統領を擁護するために人々が結集した大規模な行進を目撃しました。

結局、その日々は印象深く、実に楽しい日々でした。しかし、私たちは戦争に勝ったわけではありません。帝国主義と資本主義の利益は、キューバ革命が始まって以来そうしてきたように、あらゆる可能な手段を通じてわれわれに敵対的に働き続けるでしょう。

しかし、人民主権の擁護にコミットした私たちの運動は、この瞬間から、社会変革のための新たな力を持って現れたと私は信じています。私たちは、攻撃が持続し、激化する可能性があることを認識していますが、ベネズエラの人々、つまり革命と変革のプロセスに同調する人々は、自らを守る能力、信念、決意を示しています。したがって、我々は戦争に勝ったわけではないが、1月9日と10日の出来事は勝利と見なすことができます。この戦闘には勝ったのです。

私たちはこの結果に満足していますが、ボリバル・プロセスを急進化させ、コムーナ・プロジェクトが、最終的には人々の直接参加を通じて共産主義を実現し、集団的解放の新たな地平への道を開く条件を作り出すことに引き続き全力を傾けます。

マドゥーロ大統領は就任演説で、憲法改正案とともに、2025年から2031年の期間に向けた7つの変革路線を概説しました。これらの変革は何を意味し、なぜ今日必要なのでしょう

か？

ほぼ一年間、マドゥーロ大統領は、「7 T: 7つの変革」と呼ばれるボリバル・プロセスのロードマップに取り組み、それについて話してきた。最初のTは**経済変革**であり、これは社会的生産関係の再編成のことです。ただし、宣言はかなり広範なもので、その内容を批判的に検討する必要があります。

第2のTは、**完全な独立**に焦点を当て、チャベス司令官から受け継いだボリバルの教義に基づいて、文化的、科学的、教育的、技術的な主権を構築する必要性を強調しています。

第3のTは、主権の問題と密接に結びついている**国内および領土の安全保障**を扱っており、特にアメリカ帝国主義に包囲された国にとって極めて重要です。

第4のTは、**社会主義モデルの刷新**です。私たちの具体的な現実を前提として社会主義への道を明確にする必要性に焦点を当てています。私たちは、コムーナがこの「刷新」の中心となることを提案しています。

第5のTは、**包摂（インクルージョン）と参加の政策**であり、参加型民主主義の強化を目指すと同時に、ジェンダーの包摂、性的多様性、包括的な反人種差別政策の推進を目指すべきだと私たちは主張します。

6つ目のTは、**生態系の変革**です。この変革を含め、これらの変革の多くは、チャベス司令官の「祖国計画」（Homeland Plan）に由来します。生態系の変革は資本主義が生命そのものを脅かすため、喫緊の課題であり、早急な行動が必要です。私たちは、気候危機に対処するための生産と消費の再編成は、社会主義的でコムーナの枠組みを通じてのみ達成できると信じています。

資本の論理では、人類によってではなく、資本主義システムによって生み出された危機に効果的に対応することは不可能です。

第7のTは**地政学**に焦点を当てています。ボリバル革命が始まって以来、チャベスは、アメリカ帝国主義とそのヨーロッパの同盟国によって支配されていない世界システムへの参

加を提唱しました。第 7 の T は、この伝統を引き継ぎ、グローバル・サウスの民族解放運動と連携します。

これら 7 つの変革は重要ですが、マドゥーロ大統領が提案した憲法改正はおそらくそれ以上に重要であると言えるでしょう。なぜこの改革が必要なのでしょう？

2009 年以來、コムーナは社会主義建設の道と目的地として解釈されてきました。ボリバル革命は 2005 年から 2006 年にかけて自らを社会主義と宣言しましたが、私たちはまだそこにたどり着く方法を発見していませんでした。彼の『Aló Presidente Teórico 1（こんにちは、理論家大統領 1』（2009 年）で、チャベスは、コムーナが社会再編成の中心柱であるべきだと強調しました。ベネズエラ・ボリバル共和国憲法は、その前文に「参加型民主主義」と「主役的民主主義」の原則を掲げており、それが完全に実現されれば、われわれのコムーナのビジョンと合致します。コムーナは、商品と富の社会化を優先する協同的で協力的なアプローチを体現しており、最終的には生活のあらゆる側面の実質的な民主化につながります。しかし、憲法の前文はコムーナについて言及していますが、明示的には言及されていません。ボリバル政府がコムーナにシフトしていることを考えると、憲法を改正して、コムーナを条文に明確に組み込むことが不可欠です。

マルクス主義者でありかつ革命家として、私たちは法律だけでは社会を変革できないことを認識しています。階級闘争を通じて人間は変化を生み出すのです。しかし、私たちは法的ツールが変革のプロセスに役立つ可能性があることも理解しています。「コムーナ法」と「人民権力法」は、チャベスが 2009 年に提唱したコムーナの道に沿って前進するための重要なツールでした。

コミュニオンは、ソビエト連邦で克服された賃金搾取に対する共産主義の代替案を代表しているだけでなく、資本の新陳代謝を超越する手段も提供していることに注意することが重要です。



A communal assembly in Petare, Miranda state. (Communes Ministry)

チャベスは、ハンガリーの哲学者イシュトヴァーン・メサロスとの豊かな対話の中で、ソビエトのプロジェクトに対する批判を彼の考察に取り入れました。メサロスは、生産手段の私的所有、つまり賃金搾取が廃止された一方で、資本に特徴的な専制的で権威主義的な構造はそのまま残っていたと主張しました。言うまでもなく、ソ連からは、その長所と短所の両方から学ぶことができます。コムーナは、政治だけでなく経済においても、実質的な民主化を完全に達成することを目指しています。

だからこそ、マドゥーロ大統領の提案であるコムーナを中心とした憲法改正が極めて重要なのです。

ウゴ・チャベスのビジョンの主要な要素の一つは、「¡Comuna o Nada!」（コムーナか無か！）というモットーに要約されたコムーナとコムーナ権力の概念であり、ボリバル革命にとってコムーナ空間はどのような意味を持ち、今日それをどのように認識していますか？

チャベスは 2005 年から 2006 年頃に社会主義について議論し始めましたが、彼がコムーナの考えを提案したのは 2009 年になってからでした。その瞬間から、コムーナは戦略的な地平線となり、集団的解放への道となりました。チャベスの思想とボリバル革命は、ボリバル主義やグローバル・サウスから見た解放のビジョンなど、多くの強力な思想を包含していますが、私は、コムーナはこれらすべての思想の統合を代表しており、その「発見」は革命の分水嶺の出来事であると私は主張したいです。

ボリバル革命にとってのコムーナの重要性は計り知れません。それは革命の目標の実現を体現し、また、世界中の他の変革や革命のプロセスに光を当てることができます。しかし、コムーナの概念はチャベスだけの発明ではありません。それは他の革命運動に歴史的なルーツを持っています。例えば、コミューンは中国革命において極めて重要な役割を果たし、ベトナムにおける帝国主義に対する革命闘争において、コミューン形態は重要でした。

身近なところでは、コミューンという概念はラテンアメリカの文脈の中で深く共鳴している。私たちの大陸の多くの先住民社会は歴史的に共同生活を送っており、今でもそうしているところもあります。これは単なる憶測ではありません。私は、アマゾナス州(ベネズエラ南部)のフオットージャのコミュニティで、所有が集団的であり続け、仕事が協同して組織化され、余剰分が個別に充当されないことを直接見てきました。

ペルーとボリビアのアンデスを見ると、アイリユスもコミューンであったことがわかります。同様に、植民地主義に抵抗することで、クンベ、キロンボ、その他のマルーンコミュニティは植民地時代の抑圧の外で組織されました。そこでは、財産が集団的に保有され、意思決定は非権威主義的な集会ベースの方法に従って行われました。

コミューンを論じるとき、私たちはチャベスを称えるだけでなく、今日のコムーナ建設を豊かにする歴史的、現代的な組織形態からも引き出します。

現在のベネズエラには、活気に満ちた社会に当てはまると思われるように、コムーナ建設に貢献する文化的習慣があります。例えば、サンコチョ(日曜日に近所の人たちが集まってシチューを調理し、それぞれが異なる食材を提供するコミュニティイベント)の実践は、この協力の精神を体現しています。さらに、カヤパの先住民族の慣習は健在です。カヤパ

は、道路の清掃や道路や学校の修理など、特定の問題に取り組むための集団的な取り組みです。これらの慣行はベネズエラの文化に深く根ざしており、コムーナの絆を育む上で重要な役割を果たしています。

さらに、ベネズエラ文化における最悪の侮辱の一つは、誰かの母親を呪う以上に、誰かを利己的またはケチなことを意味する「ピチレ(pichirre)」と呼ぶことです。これは、寛大さと相互支援を文化的に重視していることを物語っており、それはコムーナの組織化にとって不可欠です。これらの文化的慣習と想像を強化することは、コムーナを構築するために重要であり、それらは未来への道しるべとして機能します。

コムーナについて考えるとき、私たちは歴史と既存の文化的慣習に根ざした再編成の形態を考えるべきですが、過去に戻ろうとはしません。コムーナは科学と技術を統合しなければならず、それは単に「代替物」であってはなりません。むしろ、それは私たちの努力の中心であるべきであり、主導する国になるために経済の指揮を執らなければなりません。



One of the communal initiatives that President Maduro is promoting is the communal consultation. There were two in 2024 and there will be six in 2025. (Communes Ministry)

あなたの意見では、ニコラス・マドゥーロ大統領の任期中、コムーナ空間の経験は無視されましたか？

2015 年にバラク・オバマがベネズエラを「並外れた異常な脅威」と宣言した際、ベネズエラとその国民に対して一連の一方的な強制措置が放たれ、ベネズエラを劇的な危機に陥れました。封鎖は爆弾のない戦争です。

キューバの人々はこれをよく理解しています；封鎖が健康に与えた影響、心理的な打撃、人命の損失、そして故郷を離れることを余儀なくされた家族・・・封鎖が強まると、政府は価格統制の撤廃など、いくつかの自由主義的な措置を実施しました。

チャベスがしばしば私たちに思い出させるように、ベネズエラは社会主義国ではないが、ある種の抑制メカニズムが確立されていたことに注意することが極めて重要です。これらの障壁の多くは、帝国主義の封鎖の圧力の下で崩壊しました。強制的な措置によって引き起こされた壊滅的な被害に直面して、政府は当初、コムーナの側面にほとんど注意を払わず、代わりに既存のシステム内での経済回復を促進することに焦点を当てました。

興味深いことに、多くの高齢者が死を宣告され、慢性疾患を持つ人々が必要な薬を手に入れない困難な時代に、ほとんど何もなかった時代に、人々はコムーナに賭けるようになりました。

チャベスは、政府が石油収入の管理を通じて差し迫ったニーズに対処することができた商品のピークの 2009 年に、コムーナを提案しました。その結果、コムーナの提案は肯定的に受け入れられ、多くのコムーナが設立されましたが、コムーナの組織の緊急性はそれほど感じられませんでした。

しかし、深刻な危機に見舞われた 2017 年までに、コムーナは再興し始めました。封鎖の暴力は、政府に資本への譲歩を強いましたが、それはまた人々が共同プロジェクトに戻るきっかけにもなりました。

最近では 2022 年以降、特に昨年に、政府はコムーナに焦点を戻しています。マドゥーロ大統領は以前のモデルの疲弊を認識し、人々の声に耳を傾け、コムーナ組織化を開始し、それが政府と人民とのつながりを強化し、チャベスタの士気を再充電したと私は信じています。

チャベスのコムーナに対するビジョンは、決して自治に関するものではありませんでした。彼は常に、コムーナは政府との協力関係の中で成長すべきであり、それは彼らを支援するだけでなく、コムーナの社会的所有企業の創造のための物質的条件を生み出すべきであると強調しました。

要するに、封鎖によって課せられた中断の間、政府とコムーナ運動との間にはいくつかの緊張がありました。しかし、近年、私たちは関係と親和性を再構築する方向への美しい変化を目の当たりにしています。しかし、コムーナ運動とボリバル政府との間には決して亀裂がなかったことに注意することが重要です。有意義な活動に従事している大衆組織は、一度も中断を提案したことがありません。それどころか、批判的な対話の瞬間があり、政府は耳を傾けました。

コムーナ運動は、この方向転換を心から支持し、祝福しており、それは最終的に人民の勝利を表しています。

ヨーロッパ出身の国際主義者として、ベネズエラの現状に関する西側の「左派」の立場について、どのようにお考えですか？

まず、世界中の多くの左翼組織と無数の同志が、ラテンアメリカで起きている変革と革命の過程を支持していることを認めることから始めたいと思います。

しかし、左派の一部には驚くほどヨーロッパ中心主義的な部分もあります。これらの人々はベネズエラで何が展開しているかを、自国で作った自分の物差しで測ることがよくあります。彼らは、私たちのユニークな歴史、ベネズエラの人々が耐えている戦争、アメリカの従属国としての地位、そして石油賃借主義としての特定の力学を無視しています。要するに、多くの欧米の「左翼」組織は、私たちがラテンアメリカで直面している現実、つまり、部分的には、植民地主義と、グローバル・ノースからの富の搾取の進行中のメカニズムの直接的な結果である現実を把握し損ねているのです。

その結果、私たちは限定的な解釈だけでなく、あらゆる困難に立ち向かってより良い社会を築くための私たちの努力を否定するほど過度に悲観的な解釈に遭遇します。人民権力とコムーナ運動は、単に政府によって利用されているだけとか、日和見主義的であると主張する者さえいます。彼らの見解では、私たちの運動には主体性と独立した思考と行動の能力が欠けています。

しかし、この地に住み、この革命に献身している私たちにとって、悲観主義やノスタルジアは手の届かない贅沢品です。われわれが直面する現実、すなわちわが経済の依存と絶え間ない帝国主義の攻撃は、われわれが闘うことを要求し、希望なしには闘うことは不可能です。さらに、私たちには歴史的な基盤とロードマップがあり、それは決して小さな成果ではありません。ベネズエラ国民にとって、失敗するという選択肢は全くありません。

北部のオブザーバーがベネズエラとキューバの状況を分析するとき、彼らの最初のステップは、社会主義的の代替案(私たちの場合はコムーナ)を求めて努力している人々がどこで、誰と一緒にいるのかを理解することであるべきです。そうすれば、ここで何か特別なことが起こっていることに気づくでしょう。それは完璧ですか？ いや、矛盾だらけです。しかし、それを支持し、コミットする価値はあるのでしょうか？ もちろんです。もし人が実質的な正義に共感し、反帝国主義者であり、資本主義に反対するなら、ボリバル・プロセス、その政府と共同体運動を支持しないのは重大な間違いです。

ベネズエラのコムーナの経験は、世界中の反資本主義運動に何を教えることができるのでしょうか。

先に述べたように、コムーナ（コミューン）はチャベスやベネズエラ国民の発明品ではありません。それは人類に固有のものです。コムーナは、搾取、抑圧、支配から解放され、コミュニティで解放されて生きる方法を体現しています。それは、自己解放された個人が繁栄できる空間です。

私は、コムーナが世界の共産主義運動に多くのものを提供できると固く信じています。それは、賃金搾取を克服するための枠組みを提供するだけでなく、資本の論理に伴う無数の問題、つまり災害に対処するための枠組みも提供します。これには、疎外と、資本主義システムに特徴的な専制政治を含むさまざまな形態の抑圧が含まれます。

個人をモノ扱いする資本主義に内在する非人間化は、集団的、共同的、協力的な努力によってのみ解決できます。

重要なことは、ベネズエラでは、コムーナは単なるユートピアではないということです。今日、繁栄しているコムーナは数多くあります。これらのコムーナの中で、私たちは政治を理解する新しい方法と新しい社会的関係の出現を見ます。コムーナは、すでに展開している未来への窓です。

わが国が直面した最悪の危機の最中にあっても、既存のコムーナは人々のニーズに効果的な対応を提供してきました。例えば、最も困難な時期に、「エル・パナル」コムーナは、誰もが基本的な生活必需品にアクセスできるように、計画的な食料配給を組織しました。多くの場合、コムーナは民主的に、生産余剰の一部を医薬品の購入や、愛する人を亡くして葬儀サービスを受ける余裕のない家族を支援することにより、緊急のニーズに対処することを決定しました。これは、コムーナが地域の差し迫った問題に迅速に対応する能力をもっていることを示しています。

このように、コムーナは、真に人間的な未来への扉を開くと同時に、今日の人々が直面している問題に対する実践的な解決策を提供する、並外れた空間なのです。だからこそ、コムーナやその他の人民権力建設の経験を理解することが不可欠である。それらは革命の道を前進させるための貴重な洞察を提供してくれるのです。



Hugo Chávez began to talk about communes in 2009. (Communes Ministry)

この記事で表明された見解は著者自身のものであり、必ずしもベネズエラ分析の編集スタッフの見解を反映しているわけではありません。

Venezuelanalysis による翻訳。

ソース: La Tizza

【資料】



未来に向けた祖国の7つの大変革の計画 2025－2031
(2024年1月15日に発表)

https://siteal.iiep.unesco.org/sites/default/files/sit_accion_files/plan-de-la-patria-de-las-7t-uv-2.pdf

マドゥロ大統領は、ベネズエラの変革と復興のためのプラン7Tを発表した

この計画は、5つのコンセンサスとPlan de la Patriaの5つの目標から導き出された7つのラインで構成されています

共和国のニコラス・マドゥロ大統領は月曜日、ベネズエラの変革と全面的な回復を目指す新たな取り組みを発表した。

この発言は、国会本部から行われた「Memoria y Cuenta 2023」のプレゼンテーションで行われ、この計画は7つの変革ラインで構成されていると説明しました。

この意味で、彼は、この新しい作業計画が「ベネズエラが繁栄し、回復した国になるために2030年に達成する必要がある」ことを示していると強調した。

彼は、新しい計画は、Plan de la Patriaの5つの主要な目的を含む5つのコンセンサスに由来すると指摘しました。

7つのT:3Rネットの進化。

「それは、2030年に向けた7つの未来の年のための、約7つの変革、7つの目標です。ボリバルがベネズエラので永遠に生まれ変わる年、国の父が夢見たもののように、私たちが彼の息子、彼の娘、孫、そしてこの美しい祖国のすべての子孫にふさわしいもののように。無限大だ」と彼は言い、それから各行動の線を概説し始めた。

1.-経済の近代化:新しい生産的な輸出モデル、生産的な経済モデルの完全な変革。

「我々は、新たな輸出モデルに直面して経済の多様化を強化するために、国富の生産のすべての方法と技術を近代化するつもりだ」と彼は強調した。

2.-完全な独立:第2の変革は、完全な独立に焦点を当てることであり、それは「政治的、科学的、文化的、教育的、技術的側面におけるボリバルの教義を更新し、拡大する」ことからなる。

「教育開発が来なければなりません。科学、技術、文化における新しいベネズエラです」と彼は言った。

3.-平和、安全、領土保全:マドゥロ大統領は、市民の共存、正義の保証、人権の享受、社会的および領土的平和の保護のモデルを完成させることを第3の作業として提案しました。

この点の一部として、マドゥロ大統領は、諮問国民投票の後、昨年12月に推進された作業計画に焦点を当てて、グアヤナ・エセキバの防衛と発展を保証する必要性を示唆した。

4.-ソーシャル:マドゥロ大統領は、第4の変革は社会セクターに焦点を当てるため、ヒューマニスト保護モデルの全面的な更新が鍵となると述べました。

「私たちは、ベネズエラ社会主義の価値を強化し、福祉国家、その使命、そして偉大な使命の回復を加速する必要があります」と彼は言った。

5.-政治:第5の変革は政治に焦点を当てるため、彼は「我々の直接民主主義と共和党の倫理」を強化するよう促した。

6.-エコロジー:第6の変革は、ウゴ・チャベス司令官が推進する「ラ・パトリア計画」の基本的な要素である生態学的地域と気候危機との闘いに焦点を当てる。

「私たちは気候危機と闘い、意識を高め、人々を環境への影響から守らなければならない。また、アマゾンとすべての自然保護区を略奪的な資本主義の貪欲さから守らなければならない」と彼は強調した。

7.-地政学:最後の仕事は、地政学的な変革です。このため、共和国大統領は、ベネズエラを新世界構成に投入し、指導することを提案するとともに、BRICSブロックに正式に参加することの重要性を繰り返し述べた。